

**[D年] 聖霊降臨節第17主日(2020年9月20日)****【旧約聖書日課】 エレミヤ書50章4～7節**

- 4 その日、その時には、と主は言われる。  
 イスラエルの人々が来る  
 ユダの人々も共に。  
 彼らは泣きながら来て  
 彼らの神、主を尋ね求める。
- 5 彼らはシオンへの道を尋ね  
 顔をそちらに向けて言う。  
 「さあ、行こう」と。  
 彼らは主に結びつき  
 永遠の契約が忘れられることはない。
- 6 わが民は迷える羊の群れ。  
 羊飼いたちが彼らを迷わせ  
 山の中を行き巡らせた。  
 彼らは山から丘へと歩き回り  
 自分の憩う場所を忘れた。
- 7 彼らを見つける者は、彼らを食らった。  
 敵は言った。「我々に罪はない。  
 彼らが、まことの牧場である主に  
 先祖の希望であった主に  
 罪を犯したからだ」と。

**【使徒書日課】 ペトロの手紙一2章11～25節**

11愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なので、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。12また、異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになります。13主のために、すべて人間の立てた制度に従いなさい。それが、統治者としての皇帝であろうと、14あるいは、悪を行う者を処罰し、善を行う者をほめるために、皇帝が派遣した総督であろうと、服従しなさい。15善を行って、愚かな者たちの無知な発言を封じることが、神の御心だからです。16自由な人として生活しなさい。しかし、その自由を、悪事を覆い隠す手だてとせず、神の僕として行動し

なさい。17すべての人を敬い、兄弟を愛し、神を畏れ、皇帝を敬いなさい。

18召し使いたち、心からおそれ敬って主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさい。19不当な苦しみを受けることになっても、神がそうお望みだとわきまえて苦痛を耐えるなら、それは御心に適うことなのです。20罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。21あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。

22「この方は、罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった。」

23ののしられてものしり返さず、苦しめられても人を憎まず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。24そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。25あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。

**【福音書日課】 ヨハネによる福音書10章1～6節**

1「はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。2門から入る者が羊飼いです。3門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。4自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているの、ついて行く。5しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」6イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## エレミヤ書50章4～7節

4 その日、その時には

イスラエルの子らが来る

彼らもユダの子らも共に——主の仰せ。

彼らは泣きながらひたすら歩き

彼らの神、主を尋ね求める。

5 彼らはシオンを訪ね

顔をその方向に向けて言う。

「さあ、行こう。

主に連なろう。

永遠の契約が忘れられることはない」と。

6 わが民は迷える羊の群れであった。

牧者が彼らをさまよわせ

山々を歩き巡らせた。

彼らは山から丘へと歩き回り

自分の憩う場所を忘れた。

7 彼らを見つめる者は皆、彼らを食らった。

敵は言った。

「我々に罪はない。

彼らが、義の牧場である主に

先祖の希望であった主に

罪を犯したからだ。」

## ペトロの手紙一2章11～25節

11愛する人たち、あなたがたに勧めます。あなたがたはこの世では寄留者であり、滞在者なので、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。12また、異教徒の間で立派に振る舞いなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神を崇めるようになります。

13すべて人間の立てた制度に、主のゆえに服従しなさい。それが、統治者としての王であろうと、14あるいは、悪を行う者を罰し、善を行う者を褒めるために、王が派遣した総督であろうと、服従しなさい。15善を行って、愚かな人々の無知な発言を封じることが、神の御心だからです。16自由人として行動しなさい。しかし、その自由を、悪を行う口実とせ

ず、神の僕として行動しなさい。17すべての人を敬い、きょうだいを愛し、神を恐れ、王を敬いなさい。

18召し使いたち、心から恐れ敬って主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、気難しい主人にも従いなさい。19不当な苦しみを受けても、神のことを思って苦痛を耐えるなら、それは御心に適うことなのです。20罪を犯して打ち叩かれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょうか。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。21あなたがたは、このために召されたのです。キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。

22「この方は、罪を犯さず、

その口には偽りがなかった。」

23罵られても罵り返さず、苦しめられても脅すことをせず、正しく裁かれる方に委ねておられました。24そして自ら、私たちの罪を十字架の上で、その身に負ってくださいました。私たちが、罪に死んで、義に生きるためです。この方の打ち傷によって、あなたがたは癒されたのです。25あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり監督者である方のもとへ立ち帰ったのです。

## ヨハネによる福音書10章1～6節

1「よくよく言うておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。2門から入る者が羊飼いである。3門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。4自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、付いて行く。5しかし、ほかの者には決して付いて行かず、逃げ去る。その人の声を知らないからである。」6イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。

**黙想のためのノート****次主日聖書日課について**

・9月20日「聖霊降臨節第17主日」の日課主題は「上に立つ人々」。教会史上、権力者・支配者に対する教会・信者の取るべき態度・姿勢については、たとえば「教会と国家」という神学主題として扱われてきた。

・旧約聖書の物語るイスラエル史では、正典編纂において中心的役割を担ったと考えられる「預言者的伝統集団」が「申命記的歴史観」に基づいて、王権の相対化、世俗権力に対する神的権威の優位が色濃く描かれている(申命記17:14以下など参照)。しかし、これは、正典編纂の最終局面が、南北王国の滅亡と捕囚という歴史を経た後に、ペルシアの支配下で自治的宗教共同体としての再建を試みる中で進められたという側面があることを考慮する必要がある。すなわち、ペルシアの支配下で、仮にユダヤ人国家が成り立つとしても、その権威・権力は制約を受けたものでしかありえないという現実があった。そのような現実の中で編纂された旧約正典には、王権に象徴される世俗国家に対して、二つの預言者的な視点が内包されている。すなわち、地上で完全に自立した国家として実現する世俗国家は完全に神的権威に服した「神聖国家」としてこそ実現する以外にないという視点、一方で、そのような「神聖国家」としての世俗国家は地上では決して実現せず、完全に神的計画として「終末的」な事象として実現する以外にないという視点である。これらの視点のうち前者は、紀元2世紀中ごろまでにユダヤ人の武装蜂起による独立運動が挫折すると急速に説得力を失い、その後のラビ的ユダヤ教(ファリサイ派の伝統を継承した会堂を中心とする霊的宗教共同体)は完全に後者の視点に依拠したものとなった。その結果、いわゆる「ユダヤ人」は、世俗の民族国家として再建されることがないままでも、「ユダヤ教」という宗教共同体としてのアイデンティティを保持して、世界中の諸国家権力の支配下に離散しながらも、同化政策に抗って存在し続けてきた。

・初代キリスト教会は、ファリサイ派的神学の多くを收容しており、世俗国家に対する視点も、4世紀にローマ帝国によって国教化されるまでは、ラビ的ユダヤ教に近い姿勢を保っていたと考えられる。そのような姿勢の一端は、福音書の伝える主イエスの教え(マタイ22:15以下など)や、使徒書の伝える使徒たちの教え(ローマ13:1~7など)の中に見出される。使徒書日課(Ⅰペトロ2:11以下)も、そのような使徒の教えの一つ。

・ただし、日課箇所を貫く主題は、必ずしも「教会と国家」という問題設定ではない。むしろ、「羊」としての信仰者論、あるいは「羊の群れ」としての共同体論、ともいふべきことが主題となっている。そこで「羊」の比喻によって描かれているのは、「従順」や「服従」のほかに選択肢のない姿であり、それゆえにこそ、そのような「羊」としての真の「羊飼い」の認識が問われている。

**旧約日課(エレミヤ50章より)**

・「エレミヤ書」については、前週旧約日課に続くので、前週資料を参照。日課箇所は、46~51章を構成する「預言集」の一部で、表題の付記により50~51章が一つのまとまりであることが分かる。表題(50:1)に示されている通り、カルデア人の支配するバビロニア帝国の首都(すなわち王権)バビロンに対する、滅亡の預言が記されている。

・日課箇所は、1節で表題が示され2節から始められた預言の、ごく最初の部分。この預言の冒頭2~3節では、いきなりバビロンの滅亡が告げられている。バビロニア帝国は、紀元前550年ごろにキュロス(メディア人とペルシア人の血筋を引く)によって成立したアケメネス朝ペルシアの侵攻により、前539年に首都バビロンが陥落し、滅亡する。バビロニア(カルデア人)の宗教は、ベル神またはマルドゥク神と呼ばれている。預言者エレミヤは、紀元前7世紀、前627年ごろから始められたとされるヨシヤ王の改革の時代から預言活動を始め、南王国滅亡(前587年ごろ)後まで活動が続いたが、ペルシアが台頭してくる時代にはすでに没していたと考えられる。エレミヤの預言が、バビロンの滅亡を具体的にどのようなものとして想定していたのかは明らかではないが、「北から」という指示は、それがエジプトの台頭によるものではないということを示している。エレミヤは、南王国最後の王ゼデキヤがバビロンに反旗を翻してエジプトに与しようとしたことに対して批判し、バビロンによる南王国滅亡と捕囚を神のユダの民の罪に対する意志であると預言していた。

**使徒書日課(Ⅰペトロ2章より)**

・「ペトロの手紙一」は、使徒ペトロの名によって書き記された二つの書簡の一つで、パウロの協力者としても名が知られるシルワノの助けによって書かれたものとされている(5:12)。聖書学者の中には、ペトロ本人の関与を否定的に見る者もあるが、古代教会以来、ペトロの書簡として読まれてきた。ペトロは、パウロ同様、巡回伝道者のようにして宣教旅行を続け、最後はローマ教会に滞在中にネロ皇帝による迫害に巻き込まれ、自ら望んで逆さ十字架の刑に処せられたと伝えられている。執筆年代は明らかではないが、初代教会が、ユダヤ人同胞からだけでなく、ローマ当局からも散発的な迫害を受けるようになっていた時代背景の中で、信仰者の受ける「苦難」の意味をキリスト論に基づいて教え、支配者に服従するなど社会秩序に積極的に服することによって蒙る「苦難」を、人々の救われるために必要な、信者の避けて通ることのできない道として説いている。

・日課箇所では、「旅人」「仮住まい」という比喻で信仰者のアイデンティティが語られているが、これは、「出エジプト物語」におけるエジプトでの「寄留者」としての立場、また荒れ野での「天幕生活」を原風景としたイメージから来た表象。

・22～24 節は、イザヤ 53 章に基づくキリスト論で、使徒言行録 8:32～33 で引用されている聖句と一致する。初代教会において、キリストや信仰者の「苦難」解釈は、もっぱらイザヤ書の 53 章を中心とした「主の僕」論に基づいていると考えられるが、それは、主イエスご自身の自己理解であった可能性も高い。

・一方、25 節には、預言者(エレミヤ＝日課箇所、エゼキエル 34 章など)や詩編(23 編など)で用いられてきた、「羊飼い」としての「王国支配者」と「羊」としての「民」という比喩が、導入されている。この旧約における比喩は、いずれの場合も、真の「支配者」である神ご自身が真の「羊飼い」として「羊」である民を養い導くという、ある種の終末的預言が含まれている。もっとも、詩編に表れているように、それは、霊的には「現在の終末」であり、単なる将来への希望ではない。このような「現在の終末」が主イエスによって実現したと、初代教会は理解した。

### 福音書日課(ヨハネ 10 章より)

・日課箇所は、「羊と羊飼い」の比喩で教えられたまよりの冒頭部。続く 7 節以下で「良い羊飼い」の比喩が告げられる前振りとなっている。場面設定は、7 章から始まった仮庵祭におけるエルサレムでの主イエスの一連の教えや出来事の延長線に置かれている。

・後段(7～21 節)の比喩では、「羊飼い」の真実性に焦点が当てられているが、日課箇所(1～6 節)の焦点は「羊」の側に向けられている。すなわち、「羊飼い」は自分の「羊」の名を呼んで導くのであるから、「羊」はその声を聞き自分の「羊飼い」であるかどうかを判断することで、自分の身を守ることができる。これは、旧約日課(エレミヤ 50 章)で、民が「迷える羊の群れ」となった理由として、「羊飼いたち」に一義的に責任を負わせていることと対照的である。つまり、福音書日課では、「羊」が真に自分を導く「羊飼い」が誰であるかを知り、その声を誤りなく聞くようになることが求められている。これは、二重の意味で前段から議論となっているファリサイ派の人々に対する皮肉となっている。

### 来週の誕生日 (9 月 20 日～26 日)

。

### 主日礼拝の讃美歌から

・21-11 番「感謝に満ちて」(＝ I -2「いざやともに」)は、17 世紀ドイツの歌手で牧師のマルティン・リンカルトの作詞作曲。1630 年ごろ自分の子供たちのために食卓の感謝の歌として作ったが、著名な讃美歌作家クリューガーに見いだされて讃美歌集「歌による敬虔の訓練」(1647 年発行)に収録され有名になった。バッハやメンデルスゾーンが自由曲に用いている。

・21-509 番「光の子になるため」は、米国聖公会信徒の女性教会音楽家トマーソンの作詞作曲。1966 年夏の異常な猛暑の中で着想された。

・21-464 番「ほめたたえよう」(＝ I 534 番「ほむべきかな」)は、19 世紀米国の福音唱歌作家エレン・M・ゲイツが作詞、同時代のフィリップ・フィリップスが作曲した福音唱歌で 1931 年版『讃美歌』に収録され、以来、歌詞が直されながら『讃美歌 21』まで継承されてきたが、英語圏讃美歌集では皆無である。

### 21-11「感謝に満ちて」

#### Nun danket alle Gott

1. Nun danket alle Gott, / Mit herzen, mund und händen, / Der große dinge thut / An uns und allen enden, / Der uns vom mutterleib / Und Kindesbeinen an / Unzählig viel zu gut, / Und noch jetztund gethan.
2. Der ewig reiche Gott / Woll' uns bei unserm leben, / Ein immer fröhlich's herz / Und edlen frieden geben, / Und uns in seiner gnad' / Erhalten fort und fort, / Und uns aus aller noth / Erlösen hier und dort.
3. Lob, ehr' und preis sei Gott / Dem Vater und dem Sohne, / Und dem, der beiden gleich / Im hohen himmelsthronen, / Dem dreieinigen Gott, / Als es im anfang war, / Und ist und bleiben wird / Jetztund und immerdar.

### 21-509「光の子になるため」

#### I want to walk as a child of the light

1. I want to walk as a child of the light; / I want to follow Jesus. / God set the stars to give light to the world; / The star of my life is Jesus.

#### Refrain

In him there is no darkness at all; / The night and the day are both alike. / The Lamb is the light of the city of God; / Shine in my heart, Lord Jesus.

2. I want to see the brightness of God; / I want to look at Jesus. / Clear Sun of righteousness, shine on my path, / And show me the way to the Father.

#### Refrain

3. I'm looking for the coming of Christ; / I want to be with Jesus. / When we have run with patience the race, / We shall know the joy of Jesus.

#### Refrain

### 21-464「ほめたたえよう」

#### I will sing for Jesus

1. I will sing for Jesus, / With His blood He bought me; / And all along my pilgrim way / His loving hand has brought me.

#### Refrain:

Oh, help me sing for Jesus, / Help me tell the story / Of Him who died to redeem us, / The Lord of life and glory.

2. Can there overtake me / Any dark disaster, / While I am singing for Jesus, / My blessed, blessed Master?

#### [Refrain]

3. I will sing for Jesus! / His name alone prevailing, / Shall be my sweetest music, / When heart and flesh are failing.

#### [Refrain]

4. Still I'll sing for Jesus! / Oh, how will I adore Him, / Among the cloud of witnesses, / Who cast their crowns before Him.

#### [Refrain]